

ネギのネギアザミウマ

1 形態と生態

- (1)ネギアザミウマは世界中に広く分布し、ユリ科ネギ属作物においては主要害虫ですが、これらユリ科だけでなくナス科、キク科、アブラナ科、ウリ科など広範な作物に寄生します。
- (2)葉を食害するだけでなく、アイリス輪紋ウイルス(IYSV)やトマト黄化えそウイルス(TSWV)を伝搬し、多種の植物にえそ斑点などを生じさせます。
- (3)成虫は淡黄色～暗褐色で体長1.1～1.6mm程度、成熟幼虫や蛹は淡黄色で0.7mm程度です。卵は植物の組織内に産み込まれ、幼虫は葉上で生活し、一般的に土中で蛹化します。冬期も休眠せずに植物体上で成虫で越冬し、野外では年に5～6世代を繰り返します。気温が高いほど発育日数が短くなり、夏季には2～3週間で成熟成虫となります。
- (4)近年、各種薬剤に対する抵抗性が急速に発達して発生量が増加傾向にあります。
- (5)また、これまで在来種が寄生しなかったカキ等の果樹類を加害する個体群が発生し、問題となっています。遺伝子解析の結果、これらは国外からの侵入系統である可能性が指摘されています。



写真1 成虫(体長約 1.2mm)



写真2 幼虫(体長約 0.7mm)

2 被害の様子

- (1) 成虫や幼虫が葉身の表層を食害し、その痕がカスリ状に色が抜けて白くなります。葉ネギや夏季収穫の根深ネギでは、この食害痕が直接品質に影響します。

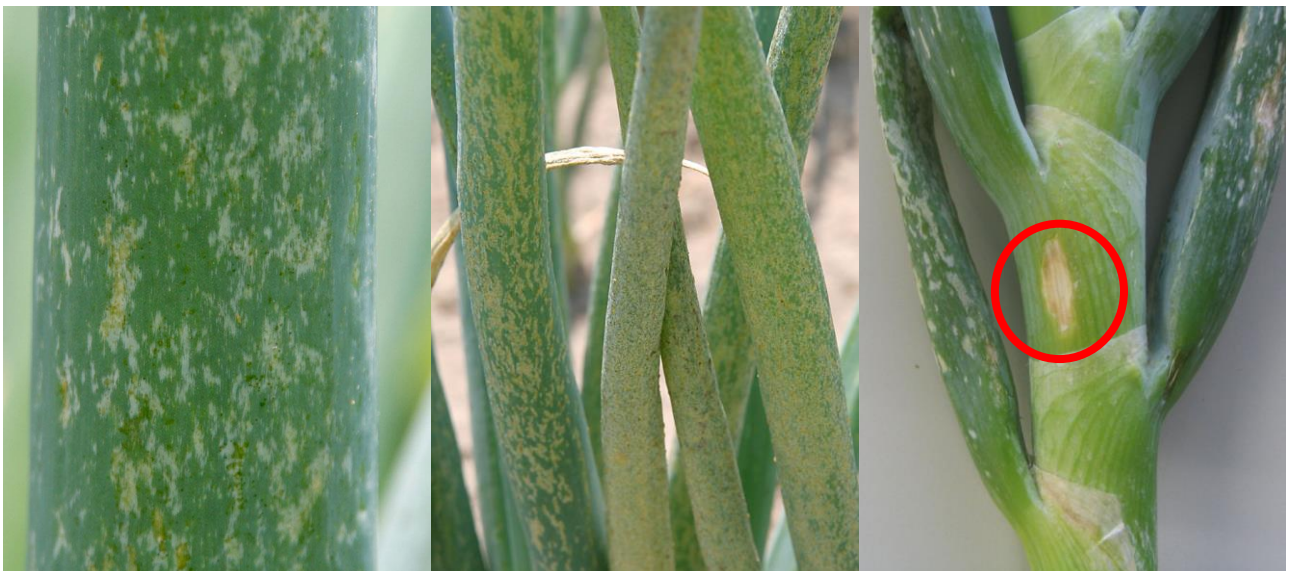


写真3 カスリ状の食害痕



写真4 苗の被害



写真5 えそ条斑病(葉鞘の病徴)

(2) 秋冬収穫の根深ネギでは食害痕による品質低下は少なくなります。しかし、ネギアザミウマの増加期となる梅雨明け後に定植する作型では、苗や定植直後の株が集中的に加害され、葉全体が白くなり生育不良となることがあります。

(3) ネギえそ条斑病の病原ウイルス(IYSV)を媒介します。根深ネギではえそ条斑病による収量・品質への影響は小さいですが、葉身の下部や葉鞘にえそ条斑が発生すると品質が低下します。

3 発生について

高温乾燥条件で発生が助長されるため、露地では気温の上昇に伴い5月上旬頃から増加し始め、梅雨明けから9月中旬頃までが発生のピークとなります。

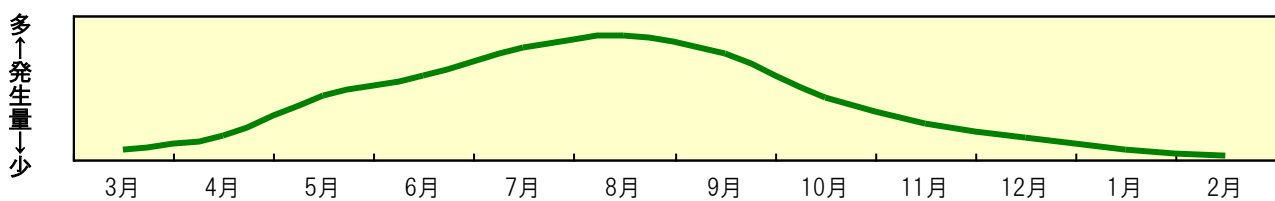


図1 ネギアザミウマの発生消長

4 防除時期と防除方法

- (1) 多発してからの防除は困難ですので、早期発見・早期防除に努めましょう。
- (2) 微小昆虫であり、肉眼で確認するのは困難ですので、葉身を観察して食害痕で発生状況を確認してください。
- (3) 発生時期が長期にわたるので、定植時及び土寄せ時の粒剤施用と散布剤を組み合わせる必要があります。
- (4) 育苗ほ場での発生も多いため、は種時からの防除を心がけてください。
- (5) 寄生植物が多岐にわたるので、ほ場周辺の雑草管理を徹底しましょう。ほ場の周囲にソルガムなどの障壁作物を設置するのも効果的です。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■ 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409

埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県